
夢現

鹿野島 なほ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夢現

【Nコード】

N3781W

【作者名】

鹿野島 なほ

【あらすじ】

黒髪の地味でごく普通な女の子、なほがひとりの不良に絡まれ新たな出会いが！そして色々な経験を積んでゆく。しかしそれ、実は

.....

1 (前書き)

これはずっと前から書きたかったお話ですねっ。

0時56分

また今日が始まった。
進めてもない時間が進み
今日が終わり明日に変わる

「寝る…か…。」
わたしは読みかけの小説に押し花のついたしおりをはさみ、電気スタン드를消灯した。

ジリリリリリ

あっという間に目覚ましが鳴った。しゅしゅ目覚まし時計を止める。制服に腕を通し、真っ黒で長くつやかな黒髪をていねいにとかす。

階段を降りると、過保護すぎる母が朝食を作って待っている。

「なほちゃん！今日は早いね。えらいわね早起きなんて…」

わたしの母親は10年前に父親と離婚。

それからシングルマザーとして、一人っ子のわたしを育ててきた。まあそんな母親はすごいとは思っけど離婚した理由は知りたいとは思わない。

だって今聞いたって別に意味がないし、母も正直にすべては話さないと思う。

そして母は常に笑ってる。

話すときも、寝るときも、料理作るときも表情を変えたりしない。

なんでだろう。

わたしはずっと思っていた。

なにかを隠している、内面に詰め込んでいる…

そんな顔にしか見えない。

疑問に思うけど聞くことは出来なかった。

こんな過保護で弱々しい性格な母親の子供が、気強くなんでも言えるような強い勇者になるわけがない。

わたしは朝食もそこそこに家を出た。

静かな朝だった。

小鳥たちが口笛を吹き、

人々は朝の清い時間を有意義に過ごしていることだろう。

ゴミを出しにきている近所のおばさんも、深い深呼吸をしている。

太陽光がまぶしかった。

でもじりじり暑い光ではない。

ふんわりと暖かい日差しが朝のひんやり冷たい空気とちょうどマッチ

チしていい気持ちだった。

わたしは深呼吸をした。

…と思った瞬間

背後から爆音が聞こえてきた。

なんなのよ、朝っぱらから！

ブォンブォン！

爆音は背後に迫ってくる。

でも振り向かなかった。

振り向いたってヘンな不良に絡まれるだけ！

キキーツ

振り向かなくても絡まれる…。

わたしの真横に1台のバイクが止まった。

わたしは真横を向いた。

「おはよツ…ス…」

そこには…え！？男！

茶髪にピアス、シャツのボタン3こ開けにパンツ見えそうなズボン！最後のしめくりに眉毛なし！なんなのこの不良は——！

「…だ、だれ…？」

男はバイクのエンジンを止め、降りた。

わたしは恐る恐る聞いた。無駄に絡むと危険だからね！すると男は、にこつと笑いながらわたしの目を見つめた。

…意外に綺麗な目…してる。たれ目に二重。

「木崎翔^{くさきしょう}」

……

木崎…翔…いい名前してんじゃん…。
はっ

だめだめ！なにわたし考えてんの！？自分のほか。

「なんの用。」

わたしは冷たく言ってみた。

木崎翔つてやつはキョトンとした顔でわたしを見て笑った。

「あつはは、相手に名前を聞いたら、自分も言つのが当たり前だろっ？」

え！？

なんなのコイツ！意味わかんない！わたしも名前言えつての！？

嫌！こんな変なやつに名前言うなんてただの損、損！！

わたしは首を横にかすかに振った。すると木崎翔つてやつは優しい瞳^めでにこつと笑った。

…そうさりげなく笑うのがたまらないわ…

わたしは少し顔を赤らめた。

「言いたくないなら言わなくて…いいよ。後ろ乗ってけば？学校まで送るよ。」

……………は？

なに言ってるんのこの人！

送る？わたしが見ず知らずの不良のバイクに乗る！？

誘拐されるわっ！

その感情が顔に出たようだ。

木崎翔が少し困った顔をした。

「…ごめんね、俺なんかが急に話しかけちゃって…」

ああ。そんな瞳で見られても困るわ…。照れる照れる。

って。なにこんな不良に見とれてんのよ。

さつさとこの場から逃げなきゃ。わたしは前をむいて、歩き始めた。

静かに、静かに…ね。

無視されて困ったのか、木崎翔がバイクを押して、着いてきた。

「なによ。」

もうこんなしつこい俺きもい！

…それともわたしが性格悪過ぎなの？わかんないけど、嫌だから。

「…急にごめん。けど俺いますっげー気分悪くてさ…」

…？気分悪いってどういうこと？具合悪いってこと？

それとも演技とか（-_-#）？

でも気になる。

こんな不良なのに、

どこか優しくて綺麗な一面もありそうで…

わたしはうつむきながらずっと黙っていた。

「誰かに、話を聞いてもらいたかったんだ。だけど君の気分を悪くさせることしたなら謝るよ。」

低くて爽やかな声。

耳につくような声……。

「俺…行くよ。」

…気になる。

わたしはしばらく迷い続けた。

どうするべき場合なのか？

ただ前に歩くばかりで木崎翔にはなにも言わなかった。

その間、木崎翔はうつむいたままバイクに乗る準備をしていた。

木崎翔とは何者なのか？

なんでわざわざわたしに話しかけたの…？

どうしてこんなに迷わせるようなことする？

とうとうエンジンがついた。

ブォン

気になる存在だった。このまま木崎翔の消えてゆく後ろ姿を見ているだけでいいのか？

それとも”待つて”って…

でもこんな仲のいい近所のおばさん達がいる住宅街の中

こんな不良と絡んでるなほちゃんがいた、なんて噂が広まったら…

わたしだけで済む問題じゃない！

でも、でも…！

木崎翔はバイクにまたがった。
そしてわたしに向かってささやいた。
「それじゃ、またね。」

ブォン！

行っちゃう、行っちゃう！

木崎…翔…。

突然背後から現れた謎の不良…

またね、だって…へへっ。

あ、行っちゃう。

「鹿野島なほ！」

わたしは声を張り上げた。
エンジン音と距離的に普通の声の大きさじゃ足りないから。
初めてこんな大声…出した。

この裏返った大声に、さすがに木崎翔も気づいた。

そしてあの綺麗で優しい

「それを待ってた。」

笑顔を見せてくれた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3781w/>

夢現

2011年10月9日16時02分発行